



すみきり
順

八十番
共二

中村俊定文庫
文庫 18
123
2



18 pages

中
俊
定
村

越
三
山
日
田
印
市
郡
國



詠諧炭俵下巻



穉之部

秋のほろいづれの中り
月を教て時俵のなると
いづれなり

名月

明月也	見つゝもみぬお下と	湖春
名月也	様一取よハリ	赤来
家實て	ことし見初る月也外	荷葉

名月也	信明起す	蓮の	好	酒屋		
名月也	生か揚り	江の	月也	里東		
りら	ぬの移のらくら	よの	月	行年		
名	ことら	も	と	し	月	去角

むぎの仲秋の月とめし
えはしし 望み書不盡の物と

山月ふこみゆらと
町
名

七月

世のふれをておのりて
里人よもしきおわか
とよおのりておのりて

壺若菜

おのりておのりておのりて

おのりておのりておのりて
おのりておのりておのりて

朝点

明国

朝点のふれをておのりて
おのりておのりておのりて
おのりておのりておのりて

くのぼりのよめちうのらに
 うもわくくみんを物出の
 むもくかんくくれしあう
 大さくくつる給めうま
 うつれしんら様の口と
 みくくもかりふんをまの
 子におられおくくやほこ
 のはよまのくもみくく
 のほよとせりくくくく
 くのぼりのよめちうのらに
 のよめちうのらに

くのぼりのよめちうのらに
 うもわくくみんを物出の
 むもくかんくくれしあう
 大さくくつる給めうま
 うつれしんら様の口と
 みくくもかりふんをまの
 子におられおくくやほこ
 のはよまのくもみくく
 のほよとせりくくくく
 くのぼりのよめちうのらに
 のよめちうのらに

石巻

のらに
 うもわくくみんを物出の
 むもくかんくくれしあう
 大さくくつる給めうま
 うつれしんら様の口と
 みくくもかりふんをまの
 子におられおくくやほこ
 のはよまのくもみくく
 のほよとせりくくくく
 くのぼりのよめちうのらに
 のよめちうのらに

冬之郡

初冬

風	や	沖	わ	さ	い	り	山	の	う	れ	其	角
市	中	や	木	の	あ	も	落	す	し	く	此	流
冬	秋	の	紙	よ	と	期	み	ら	と	あ	ら	此
楓	本	や	流	流	よ	り	を	冬	う	ま	不	梁
松	の	葉	の	ふ	れ	り	を	や	小	松	新	鹿

川	も	冬	の	氷	の	さ	ら	ふ	む	し	此	柳	葉
風	の	さ	ら	ふ	り	を	も	た	ふ	ら	物	者	
夕	と	暮	や	猫	の	も	も	と	い	ふ	此	物	者
田	や	盼	と	し	り	を	猫	の	面	三	八	葉	

みまひりて

ま	杖	の	杖	を	す	わ	け	杖	皮	を	此	杖
等	月	よ	い	葉	の	葉	秋	の	さ	む	と	此

此杖 此杖 此杖

時辰

芋食の後つらしき御時辰

思こくや申の可ぬのりこゝろ

き道

わの昔もよよね

りぬるを今もいせぬよきもの

まゆとらぬくふししなれぬ

新あめ

小把重なるの向を挽やぬ

大根引

病とあし小塚とあるや大根引

所とあしとあれんふんえち根引

外とあしとあれんふんえち根引

何むさ とよみ
と

人ありの夜をささるしは止 せげ

ふ比を先ね様とさわさ止 永陪

るまやふゆもふくささ止 利牛

えりともさうしてさしきの月 初月
実流ゆきうらよしきの月 里集

右のころをさりののきく

にゆあうの

くさつとみく

やまきりあ

紫藤

紫藤

雪

まのちよとごちり	も	新し	と	あ	り	性
ゆきのえぢり	や	まの	鼻	く	ら	の
くさ	や	崎	の	ま	ま	の
雪	の	り	く	を	借	し
ま	の	り	や	う	く	の
						あ
						性
						の
						ま
						の
						あ
						性

その花は五さしし

形	の	ま	の	こ	も	新	し	と	あ	り	性
ま	の	新	し	や	い	ま	く	わ	り	あ	り
く	さ	や	え	さ	や	う	清	く	あ	り	性
炭	の	ま	の	様	所	さ	ら	雪	吹	り	性
海	の	ま	の	ま	の	ま	の	ま	の	ま	の
江	の	ま	の	ま	の	ま	の	ま	の	ま	の

題不知

かるしきの物よれぬ杖部

聖人
呂九

とそそ果や物糖のしる 命の器

老道

鏡門のきしそ 雲みり 了了おん

了六

水大焼のらるぬとくく 舟くす

船月

白うをのとりきい包れや 夜の名

く道

情のちやあつとさ 方の五去ス

心ヤ

度中やとくに大龍のあつたあ

砂身

所と所

縁地えんして 神一乗

吾角

海へ降りて 雲や 舟くす 信の器

全

しんご

種もさへ己ら棚つる大工も	造道
旗押さへとくはよ作ら	平
所つてやえ振さるる海に	少
山外の見ゆよあまの江に	名
行まや来さるるうりあま	智

新古今

このくれも又くちあし一何ころ	新
とうまにぬきうかものむかしのくれ	本
あしよとてさうつねさのくれ	智
縁ゆきのゆびくしよまのくれ	新
さりのぬかきさうらふ候に	新
よのくれいよふこころ福つしん	少

老其りの多うくれのり

うしろきー号之か 中上

九段のやうーの 一十一

三十一

わいふよふとふもあふふ

四十一

詠諧秋之部

共布

秋のうしろの枝より新乳より
 ふうれて一羽 ぬりうまの 香
 多兵衛又曰備 持ち 貝の 吟
 月の 照らし 世 靡の 門
 社父うまの 古 柳と 花よりあじ
 つまひたふハ ねんころと じ
 共布 共布 共布 共布 共布

下京ハ宇氏の 妻おこつて 全
 坊主の 妻より 長を ぬりうま
 と 怪の ありして 折る 八つ 下
 と 吹く 風より 香乳 の 針
 甲の 畔より ふる 抱て 扱く 玉
 と 考め ぬりうま 狐の 舌
 川 燈の 行 ぬりうま 香
 新く ぬりうま 香 ぬりうま

炭林

共布

書

山形

廿七

小 平 治 心 序 言 書 せ じ ち ち ち
ま ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

其 心 序

新 心 新 心 新 心 新 心 新 心 新 心

新 心 新 心 新 心 新 心 新 心 新 心

今 心 心 心 心 心 心 心 心 心 心 心

新 心 心

其 心 序

其 心 序

其 心 序

山形

廿七

天竺氏母り

加部

るるり拾いあつてし事なるる

えんしころのそり くれぬ 風

加部

入月よお八あんのりとすりあつて

利牛

海の外まておのいりるる

加部

初まわらうまあつてあつてあつて

加部

つよしつりしるるあつてあつて

利牛

所のまそしうんかあつてあつて

加部

あつてあつてあつてあつてあつて

加部

あつてあつてあつてあつてあつて

利牛

あつてあつてあつてあつてあつて

加部

あつてあつてあつてあつてあつて

加部

あつてあつてあつてあつてあつて

利牛

あつてあつてあつてあつてあつて

加部

あつてあつてあつてあつてあつて

加部

古
焚物一紙念一々 家回紙 柳路

後と望んで今もぬく 柳路

髪をいれしを思ふと 柳路

先づ沖よりしをみゆる 入舟 柳路

ゆてふふきあつてしをみゆる 柳路

ちりこも風のうらみ 柳路

秋て日た

や、川をくると興

芭蕉

旅人の肩にたれしきん

芭蕉

降つてハ、かまひあふ

芭蕉

よみ、枕の小ををりて

芭蕉

川とちよふ月をみる

芭蕉

おのれをながめ、あふ

芭蕉

新木のあまふの

芭蕉

網の老をつとふ

芭蕉

こゝろは、こゝろ

芭蕉

いづれか、おのれ

芭蕉

浪のちよふ、おのれ

芭蕉

あふむ、おのれ

芭蕉

肩に、おのれ

芭蕉

上を、おのれ

芭蕉

あふむ、おのれ

芭蕉

緋雲の七つはらりをさるつれと
 堀ノ末門あらしみ千石元
 比喙の懐鬼もよと猪月と糸
 砂山 膝のうつゝま 草
 新田の喜もおらつくまのよ
 吹とられしとまをわよし
 川 流の帯しゆのよをわよし
 千地のをめうとまをわよし

利牛
 孤屋
 志直
 草
 新牛
 中住
 志直

千地を日向のまへいしとせと
 堀あし 膝の巻ふとくまをわ
 美月よほせとまをわ
 又あはらとよむまをわ
 といらとと人海のまをわ
 千地よこのむ地のをわ
 中しとて信守人の信りやわ
 登をうしととらとらわ

利牛
 孤屋
 志直
 草
 新牛
 中住
 志直

ウ

用也こし秋の野の 毫もよわ 利牛
 裡の雪子の 跡をくくくわ 孤屋
 ちくはくと早の 掃場ハヤのり 芭蕉
 月影よりの ぬくぬく 少年
 こころもまの 心の中 孤屋
 湯炭の ちりをくくくわ 利牛

芭蕉

少年

孤屋

利牛

各々白

秋風

雲のねぬき口みしん芳をこし
 日のあけよへの赤とをらして
 下音を一糸信よす明く
 あついとまじし大名の信
 才ふあら風もふかく為有短
 雲をこしれてひるこ島化
 秋風
 利牛
 砂野
 子相
 芭蕉
 秋風

熊谷の境にれもみ秋のそ
 笑ううらまてし細き 冬
 二とあてなれおもぬ川 の橋
 ちのそるー 地のをけり干りの
 竹の皮なき路も多うあのみを
 拾ふ ちのまけるのこころし
 ふふちの人もみぬ佛の女
 ささしり海のとやうくさる色
 秋風
 利牛
 砂野
 子相
 芭蕉
 秋風

ちの月のをかちて 藤 ちよ
 脊中へのちる 望もふはゆる 松丸
 上よりらのさつてよまあらりて 五推
 川くくくふ水結 りくま 石車
 名 多きそふれてきり 藤の色 行凡
 春戸へとれえふへり みる 赤水
 おふんふし 芳くくと 歌くく みる
 五集めてはむ白き 藤色 口 みる

時を捉へて 信へ ちよ ちよ
 わがく ちよとて 葉代 のれ 信と
 ちよあててくくくく 信と 信と
 ちよあへりて 火をこわて みる 五推
 又けとも 信の 念く ちよを 明 新牛
 掛ちわしして 望く ちよを 松凡
 大坂の人よ ちよを ちよの 信 新合
 信と ちよを ちよの ちよを 入 妙俊

下

撰者芭蕉門人

志士氏

野坡

小水氏 孤屋

池田氏

利牛

元禄七歲次甲戌

六月廿八日

詠諧炭俵下史之終

卷之二

七

京寺町通

井筒屋庄兵衛

江戸白銀丁

大十屋 藤 助

